

(102) 群馬県南牧村の荒船鉱山跡

この鉱山の名前は、参考文献(1)中の「6 群馬県の砒素鉱物」の項で紹介されていた事は知っていた。30年前の本である。本中の1文を抜粋する。「・・星尾という集落の北方、毛無岩という岩山付近で、かつて荒船鉱山と称して鷄冠石を掘っていた所がある。・・・たどり着くのは大変な所だそうだが、すばらしい鷄冠石がでたこともあるという。・・」。著者の草下さんは行き着けたのであろうか?

本探査記で、既に紹介しているが、西ノ牧鉱山の鷄冠石を見る事ができた。所で、ある鉱山の試料調査のために出かけた筑波大学中央図書館で、岩石鉱物鉱床学会誌を閲覧していると、荒船鉱山と鷄冠石の単語を論文題名に含んだ論文を偶然に見つけた。参考文献(2)である。54年以上も昔の論文であるが、この論文には嬉しいことに、荒船鉱山の位置が、地形図中に鉱山記号を持って記されていた。原図は非常に小さいので、拡大複写したのを図3に掲載している。これがあれば現地にたどり着くのは簡単である。これを手引きに、荒船山の登山口の内の1つである相澤地区から、沢に沿って林道を登つていけば、たどり着けるだろうと考えた。が、そう簡単なことではなかった。結局、5回の探査を行った。結果、鉱山跡を確認したとは確実には言えないが、手引きにした位置図中の鉱山記号付近で、2箇所で鷄冠石を含有した露頭鉱脈を見ついた。多分この付近に、荒船鉱山があったに違いないと考えている。今後、機会を作つて、じっくりと探査をしてみたい。良いハイキングコースでもあるので。以下5回にわたった探査行について報告をする。

第1回目の探査行を、相澤地区から行った。結果は、林道は途中で消え、結局標高差700m以上を登り切り、稜線まで登り上がることになった。近くに、行塚山があった。まったくの別ルートをとったことになった。図1中に、その経路を黒線で記入しておいた。が途中で幾つかの玉髓を採集することはできた。又、凝灰岩中に填り込んで成長している状態の玉髓も、実際に目でその様子を確認することもできた。下山は登ってきた沢をそのまま降りた。現在通行可能な林道に沿つた沢に入ったことが、ルート違いになった事がわかった。林道から外れた別の沢の上流に、鉱山跡があると判断した。が、標高差400m以上も稼がなければならないようである。別ルートを、地形図と登山本で探した。荒船山への登山ルートの1つで、荒船不動尊(標高1040m)からのルートがあった。このルートならば、水平距離は長いが、登りは緩やかで、稼がなければならない標高差は2百m強である。

2回目の探査行は、荒船不動からのルートを辿った。が、尾根を歩いている内に、ルートを間違えた。立岩のルートに進んでしまった。分岐点で不用意にも、しっかりした一応真っ直ぐ伸びている登山道の方を、何の気も無しに、簡単に選んでしまったのである。途中で現地点の把握ができなくなり、戻る。分岐点について、方向違いの道に進んだことに気が付いた。失敗。時間切れなので、そのまま帰還。

3回目は、立岩方向への分岐点で間違いなく、毛無岩方面に進み入った。途中、途中での足元、周り、谷の様相などの探査、特にズリ跡等がないかどうかの探査にも時間がかかった。現地当たりの尾根まで行き着いた。参考文献(2)によれば、鉱山の標高は1100mである。尾根は1250m前後なので、尾根から100m強下ればよいのであるが、下った後での探査の時間、その後、尾根まで登り上がる時間などを考え、鞍部の尾根の所にマーキングをし、引き返した。

第4回目。荒船不動尊から、尾根から沢に下る箇所まで、約2時間ほどで到着した。沢の上部は広く開け、下草もあまりないので、見晴らし良く、周りを探査しながら下つていった。ズリ跡、鉱山跡らしいものは無く、標高1100m以下では、沢は少し狭くなつて来たが、上り下りには困難はない。結局、標高1000m当たりまで下つた。何もない。引き返すために、沢を登り上がつた。1150m当たりで沢の斜面に白い箇所を見つける。目を近づけて観察すると、粘土化した流紋岩の表面上に、芥子粒のような赤い点々が確認できた。黄色の点々もある。粘土状なので表面は簡単に削り取れる。削り開いた新しい表面にも鷄冠石の微粒と、パラ鷄冠石と確信した。付近を再度注意深く探査すると、少ないながら、赤点の入つた転石も確認できた。白い粘土層は、露頭面積は小さいが、露頭鉱脈と確信した。周りは容易に掘り剥がすことができる。が、雨が降ってきた。鉱山跡は確認できなかつたが、露頭鉱脈を確認できることを成果として、帰還することにした。が1箇所、沢の支流先に岸壁があることを気にしながら戻つた。

参考文献(2)の鉱山記号の記載位置が間違つているのかも知れない。文献(2)の位置図は地形図中に記載されている。論文発表時である昭和32年以前の地形図を、国土地理院で閲覧することにして、筑波に出かけた。昭和23年発行、5万分の1、御田代の地形図を入手した。図4がそれである。図3の地形図は大分潰れているが、図4の地形図を原本にしたことは間違ひなさそうである。相澤地区と道場、星尾地区は毛無岩付近の峠で、繋がつてゐたことがわかる。図3中の鉱山記号の右隣にある文字らしいものは1188であった。峠の標高1188mである。参考文献(1)には、星尾の北方に、荒船鉱山があったと記されている。つまりかつては、荒船鉱山への道はこの図の道場地区から登り上つてゐたことになる。図3から図4、そして、現在の地形図に鉱山記号を書き入れると、荒船鉱山の位置は、4回目の探査でたどり着いた露頭鉱脈付近であると確信した。

5回目の探査行である。4回目の探査行で気になつて、支流の沢を探査した。途中で沢を横切るように、比較的硬い流紋岩中に微小な鷄冠石が散在しているのを見つける。露頭鉱脈である。母岩の厚さは数十cm程度か。ルーペで拡大してみると、微小ながら、赤い点々、赤い細線があちらこち

らに散在している。幾つかの標本を採集した。再度周りを探査したが、坑口跡、施設跡は見つけられなかった。

紹介している現地に行くには、本探査記以外に、荒船山の登山解説書があると安心である。良いハイキングコースでもある。時間が許すならば、「軍艦」と呼称されている断崖絶壁からなる艦岩（ともいわ）の上に立ってみるのも良いであろう。

探査日 2011年8月～10月

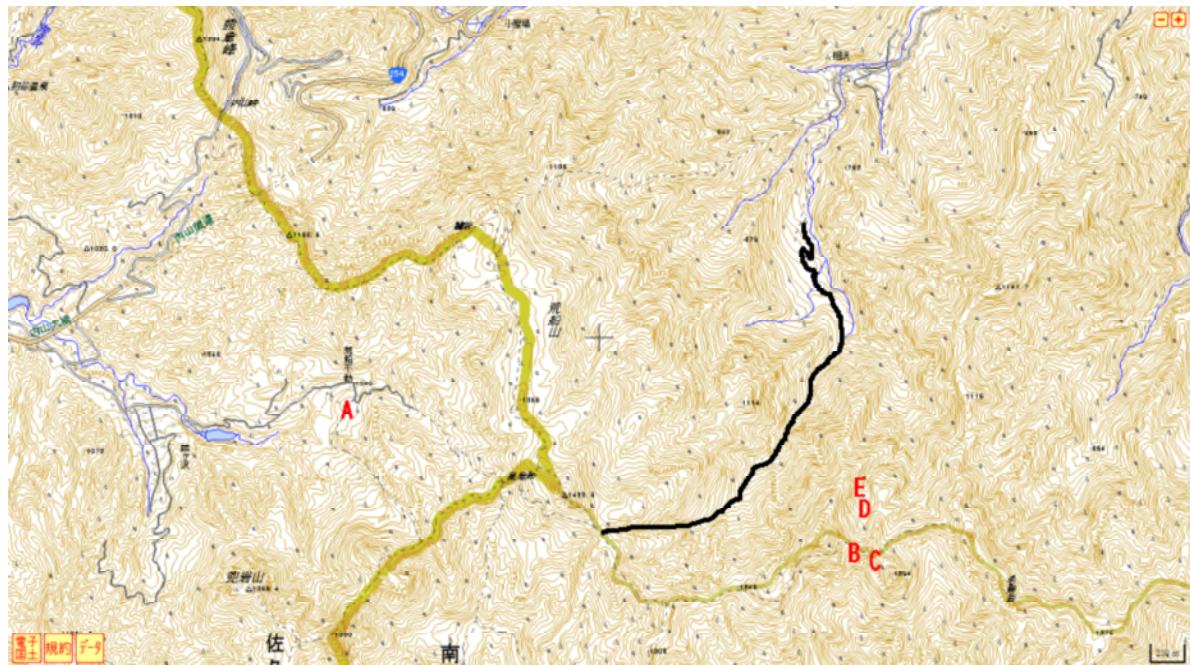


図1 国土地理院の地図サービスより複写掲載。A点は荒船不動登山口。ここまで車で登って来れる。B点は鞍部。C点には登山案内板がある。B点より視認できる。D点付近に露頭鉱脈有り。E点にも露頭鉱脈有り。手書きの黒線は第1回の探査ルートである。相澤地区から沢を登り詰めた。

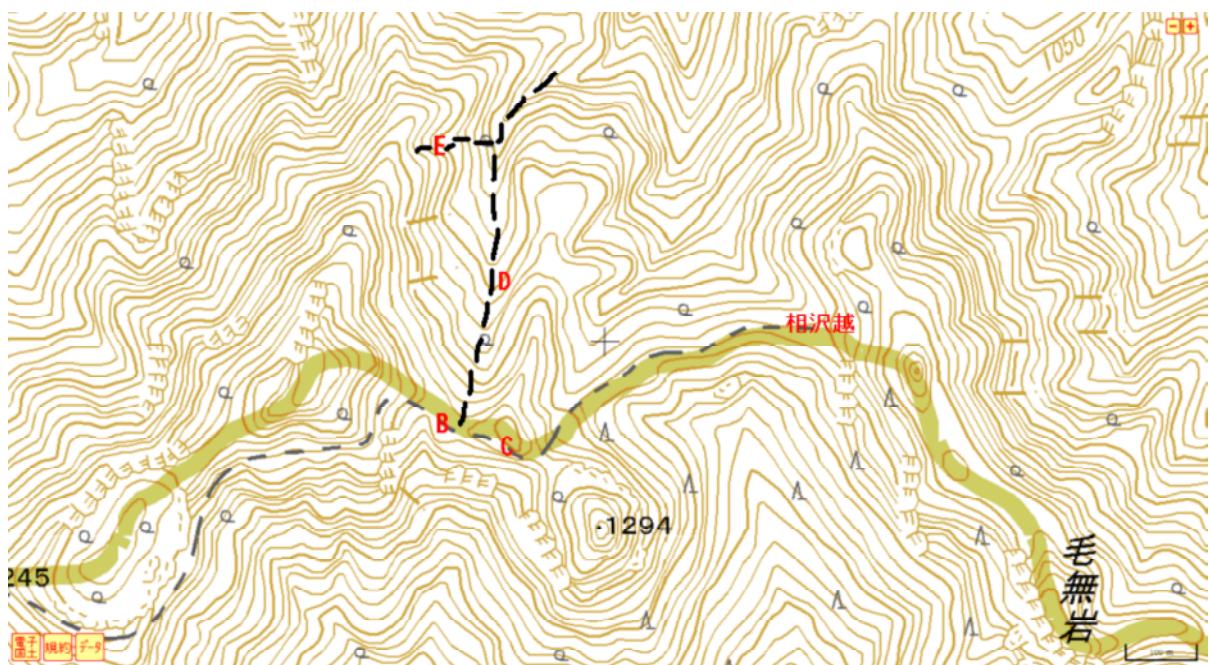


図2 図1の部分拡大。相澤地区と星尾地区を結ぶ峠の名前は相澤越。かってはこの峠を通る道があった。B, C, D, Eの文字は図1と同じ。沢に沿っての下りルートを黒破線で書き入れているが、道があるわけではない。優しい沢である。危険はない。

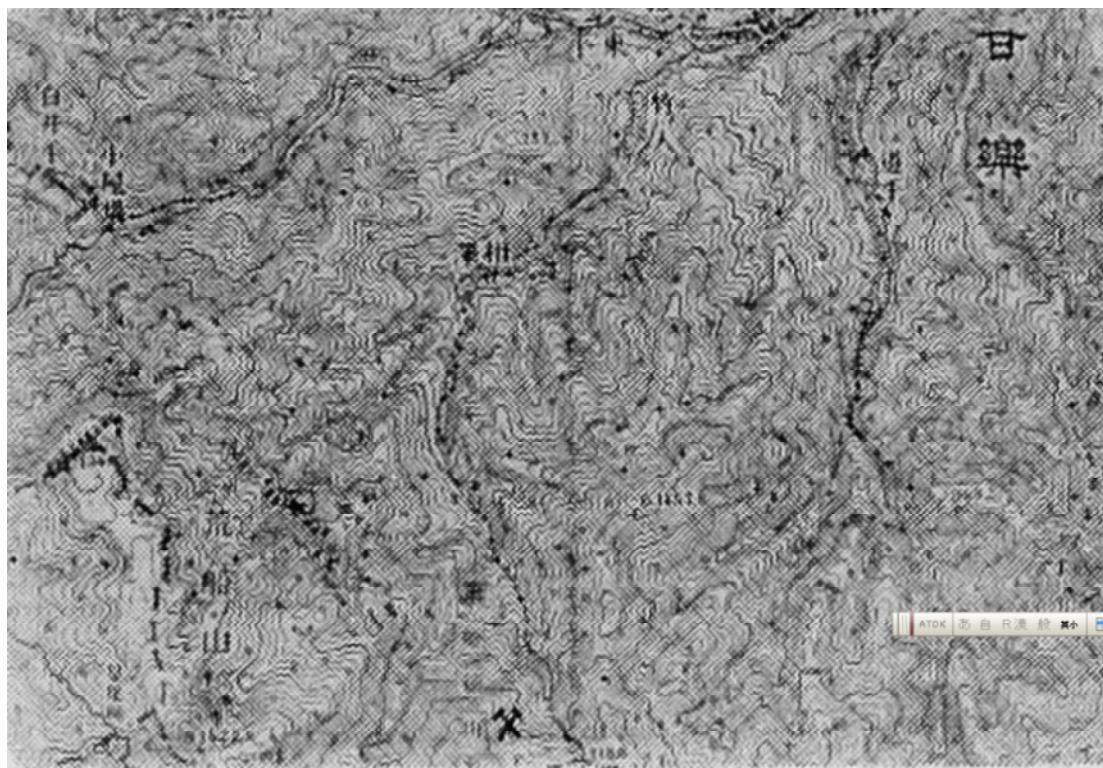


図3 参考文献(2)の原図を、拡大して複写掲載。なを、原本自体の原図は小さい上に図自体が潰れていた。従って、拡大しても見にくいくらい潰れている。が、中央下部に鉛山記号がある。荒船鉛山の位置である。荒船山、甘楽、相澤の文字は辛くも読み取れる。鉛山記号の右脇を少し斜め上下に曲がりくねって伸びている線らしきものは何か? 図1, 図2には全くない。現在の地形図からは消えてしまっている。古い地形図にたどり着いて調べた結果、昔、人の行き来した峠道であった。図4参照。

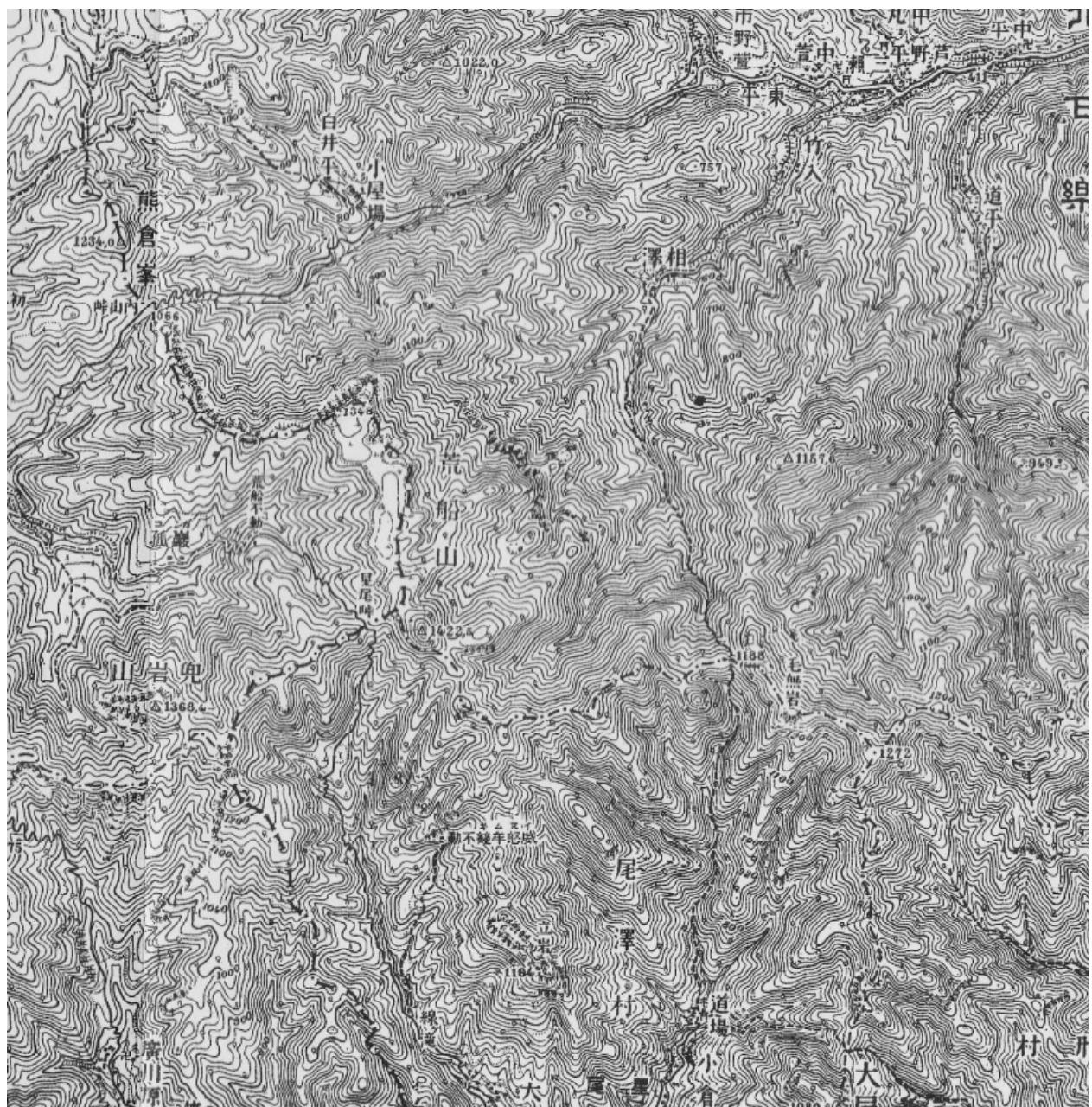


図4 筑波の国土地理院の閲覧室で入手した。有料で印刷してもらい、1枚500円。60年以上も昔となる昭和23年発行、5万分の1、御田代の地形図。有料で印刷してもらい、1枚50円。パソコン画面で見るだけならば、無料。図3の図とほぼ一致する。なを一言。大分前に、パソコン画面をデジカメで撮っていたら、注意・禁止されました。

鉱山跡写真



写真1 登山口である荒船不動尊境内内。付近に駐車場、トイレもある。中央にあるのが登山指導標。ここから2時間から2時間半で現地に到着できよう。利用のお礼にお参りと賽銭を忘れないように。



写真2 毛無岩方向と、立岩方向の分岐点である。2回目の探査行で間違った箇所である。登山道に素直に従って、立岩方向に行かないこと。毛無岩方向の登山道は下りとなっており、丸太の階段が続いている。周りを探せば直ぐわかる。この立岩と書いた白板の取り付け方、及び丸棒の地面固定位置、は不案内である。



写真3 図1、図2中のC点である。鞍部であるB点は、この写真では左下となっている。鞍部のB点から、この指導標は視認できる。



写真4 D点である。白い所が、露頭鉱脈。粘土化した流紋岩中に、芥子粒のような鷄冠石が偶に入っている。標高1150m前後か。



写真5 D点付近で、下って来た鞍部の方を撮る。



写真6 下ってきた沢の上流を向いて撮影。E点へは右側の支流沢を登っていく。



写真7 E点のある沢。



写真8 E点である。沢底を左右水平に、厚さ数十cmで露頭鉱脈がある。顔を近づけてみると、芥子粒上の鷄冠石、パラ鷄冠石が点在している。標本を幾つか採集した。



写真9 この沢の上方にあった、鉱山跡のズリのような斜面。顔を近づけて見たが、赤い点々は見つけることはできなかった。この少し上は、一応水平なプラトーになっており、プラトーの先は岸壁であった。

採集鉱物写真



写真10 写真に撮っただけの標本。灰色の流紋岩の母岩を叩き割ると、点々と赤色の鶏冠石が散らばっていた。



写真11 採集した標本の1つ。真ん中が大きさ2mmほどの鶏冠石。左側の上下に隣り合って、小さな鶏冠石も見える。

追記

相澤側からの沢のルートは捨てきれない。第1回目の探査行では、相澤から林道を進んだが、途中林道工事のため、車の通行は不可能であった。その所から、徒步で登ったのである。工事が終了すれば、大分上流まで、車で登り上がる。とすれば、標高差300m程度を稼ぐだけで現地である。が、沢の途中で上り下りが安全にできるかどうかである。かっての峠道が生きている補償は全くない。完全に潰れていると考えた方が良さそうである。不断において人が入らないと、林道は数年内で消えていく。

実は、相澤越まで入っていない。次回には、是非ともたどり着いて、峠道の状況を確認したいと考えている。南側の道場、星野地区からの峠道もある。が、途中から消えてしまっているようである。

参考文献

- (1)「鉱物採集フィールド・ガイド」、草下英明、草思社、1982年。
- (2)「群馬県荒船鉱山産鶏冠石について」、高野琴代他、岩石鉱物鉱床学会誌、Vol.41, No.6, 235頁、1957年(昭和32年)。
- (3)「東京周辺の山350」、項目(内山峠から荒船山)、山と渓谷社、612頁、2001年。